

## 名を告げ合わず

モーレンカンフふゆこ

人に初めて会う。ハウドゥユードゥ。お国はどちらですか。何年オランダに住んでいますか。なぜお国を出たのですか。御主人とはどこで会ったのですか。何の仕事をしていますか。日本が恋しくはありませんか。何年前に里帰りしましたか。日本の御家族は、お友だちは、お子さんは……いったい何度同じ答えをくり返したことだろう。紙に書いて首にぶらさげてでもおけば、どんなに楽だろうかと思う。

それでも身分証明書的な事実をならべるだけならいい。国を出た動機や、オランダに流れた道程やら、まして日本への愛憎やらをくどくどと話すと、ややこしくなる。その上めんどろな事には、動機づけや考え方が長年のうちに変わってきて、しらないうちに美化してしまう。質問につじつまが合うよう答えていると、自分が何者であるのかわからな

くなり、自分で自分を創り出してしまったことも何度かあったろう。私は本当はこういう者ですと、わかってもらえたら、という願いは、外国に居れば格別である。本を書きたいという願いの底には、それがパスポートであり、それさえあればどんな国境も無事通過できると思えるからである。

白夜の砂丘は美しい。砂丘といっても草原のようなもので、海岸線に沿って作られた防波堤である。そこで手を広げて鳥のように丘を駆け下りるのが私はたまらなく好きだ。しかしこの砂丘で一番恐いのが犬である。手を広げてすうっと飛んでいる私に、一目散に突進して来たりするので、空に舞い上がれない私は仕方なく彼方を見る真似をして立ちすくむ。犬がずうずうしくおいを嗅ぐ間、生きた心地もせず、時にはキャンキャンと、ちびのくせに大ボラを吹く奴もいて、せつかくのいい気分がすっかり台無しになってしまう。子供達が一緒だと、そのところは何とかうまくやってくれて、犬が見えたとたんに、

「ママ、大丈夫だよ。恐がる場所を見せちゃダメだよ。犬はすぐつけこむから。」と言  
い、犬が寄ってくれば

「ハイ、ホンチェ（犬ちゃんこんにちは）」と撫ぜたりすれば、たいていの犬はすぐおとなしく行ってしまう。

あの日、私は一人で砂丘に鳥に行行った。飛びまわってもどってきた砂丘の入口

に、いつもみる大きなシェパードが座っていた。ライオンのような威厳と優雅さを見せて  
……。あの馬を飼っている家の番犬に違いない。

私は道をはさんで犬と対座した。「克服するということは、一番恐ろしいことに挑戦することだぞ。」と自分に言いきかせて、試みに「ハイ、ホンチェ」と小さな声で呼んでみた。

すると何としたことか、その犬がつと立ち上がり、私の方にゆっくりと歩いてくるではないか。しまった！ 犬が私の真前に立ち止まったその恐怖の瞬間、私はわなわなと口を震わせて、「ハイ、ホンチェ」ともう一度甘い甘い声でささやいてみた。

すると彼はくるとむきをかえ、ぐいと私に背中をさし出して座ったのである。ピンと立てた耳だけを私の方に向けて。私はそつとその背中を撫でてみた。すると犬はつと立ち上がり、私の股の辺りをちょいと嗅いで、ぐるりと私の回りを二回まわって、そうして突然、私のひざの上にとっかかりと座ってしまったのだ。私はもう感動してしまって、大きな犬の首を両腕にかかえ、「ハイ、ホンチェ、ハイ、ホンチェ」と言えば、彼はぐいぐい大きな体を押しつけてくる。

長い長い間、私は犬を撫せていた。それからそおつと立って、何度もふりかえりながら帰ってきた。彼は私のあとを追うでもなく、そのまま優雅に座って、私の方をじつと見ていたっけ。

あの日から、私はめっぼう口が重くなった。ハウドゥユードゥと手をにぎって、二、三の質問に答えれば、たいていどんな人かピンとくる。ある人には、いんぎんに礼をして席を立つ。パスポートをいちいち見せなくても通過する国もあるのだと思えば、名が無くてもそんなに淋しがることもないだろう。

(歌人・アムステルダム補習校)

